様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　７ 年　 ４ 月 ２３ 日現在

機関番号：３７１１１
研究種目：若手研究
研究期間：2022～2024
課題番号：２２Ｋ１３２３５

研究課題名（和文）中近世アウクスブルクにおける公衆衛生と健康ポリツァイ：ペスト対策を中心に

研究課題名（英文）Public Hygiene and Health Policy in Late Medieval and Early Modern Augsburg

研究代表者
渡邉　裕一（Watanabe, Yuichi）

福岡大学・人文学部・准教授

研究者番号：３０８０４３１４

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,400,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、近年注目を集める都市環境史の議論を踏まえ、中世後期から近世にかけての帝国都市アウクスブルクにおける公衆衛生と健康ポリツァイの実態を解明することを試みた。新型コロナ感染症の世界的流行を経験して歴史的な疫病研究の重要性が高まっている現状を踏まえ、とくに中・近世アウクスブルクにおける都市のペスト対策の展開に着目して上記課題へのアプローチを試みた。また、当初の計画にはなかった「ペスト被害とユダヤ共同体の動向の関連性」の解明という新たな課題も浮上したため、当初の研究計画の進捗には遅れが発生したものの、疫病流行が都市社会に与えたインパクトをより立体的に検証する見通しを得ることができた。

研究成果の学術的意義や社会的意義
ペストに代表される疫病の歴史研究は、被害にあった地域や時代にのみ焦点をしぼる傾向がどうしても顕著であった。本研究は、疫病が蔓延していない常態時における公衆衛生や健康ポリツァイの展開を視野に収めることで、従来の疫病研究では見過ごされてきた都市のペスト対策の全体像へのアプローチを試みた。感染爆発と収束期の繰り返しのなかで、いかに社会が防疫対策を強化していったのかを問い直す作業を通じて、新型コロナ感染症のような新たな疫病や「未知の感染症」への対応策をどのように構築していくべきかという将来的な人類史上の重大な課題について、歴史的な視座からの意味ある示唆を提供することができた。

研究成果の概要（英文）：Based on discussions of urban environmental history that have been gaining attention in recent years, this study attempted to examine the public hygiene and health policy in the imperial city of Augsburg from the late Middle Ages to the early modern period. As the importance of historical epidemiological research has increased with the experience of the worldwide epidemic of new Coronavirus disease, we have attempted to approach the above issue with particular attention on the urban response to the plague in medieval and early modern Augsburg. Although there was a delay in the progress of the original research plan due to the clarification of “the relationship between plague and the Jewish community,” which was not part of the original plan, we were able to examine the impact of the plague epidemic on urban society from a more multifaceted perspective.

研究分野：西洋史

キーワード：感染症・疫病史　都市の生活環境　公衆衛生　健康ポリツァイ　ペスト（黒死病）

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１（共通）

１．研究開始当初の背景

新型コロナ・パンデミックの影響もあり、14 世紀半ばにヨーロッパ全域を恐怖の底に陥れたとされる、いわゆる「黒死病」に大きな注目が集まった。しかし、「黒死病」についての一般的な語りにおいて忘れられがちなのは、このペスト禍が一度だけではなく、その後も数世紀にわたって繰り返し被害をもたらし続けたことである。ペスト被害の周期性とそれがもたらす社会的な影響について考察することは、COVID-19 や今後発生するであろう「未知の感染症」とどのように向き合っていくのかを考えるうえでも、大きな示唆を与えてくれる歴史学上の重要な検討課題であることは疑いない。周期的に襲ってくるペスト禍が人々の疫病認識やその後の感染症対策にどのような影響を及ぼしたのか、この問いに答えるためには、一つの都市に焦点を絞り、中長期的・通時的に考察する視点がどうしても必要となる。さらに重要なのは、ペストの蔓延期のみに注目するのではなく、ペストが流行っていない時期に、次に襲ってくるペスト禍に対しどのような対策や準備が講じられたのか（あるいは講じられなかったのか）を問う視点である。本研究では、帝国都市アウクスブルクを対象にこの課題へのアプローチを試みた。

２．研究の目的

本研究は、申請者がこれまで進めてきた帝国都市アウクスブルクの生活必需品供給および水管理政策の実態解明という研究実績を踏まえ、中世後期から近世にかけての帝国都市アウクスブルクにおける公衆衛生と健康ポリツァイの実態を解明することを目的とした。さらに、新型コロナ感染症の世界的流行（パンデミック）を経験して歴史的な疫病研究の重要性が高まっている現状を踏まえ、とくに中・近世アウクスブルクにおけるペスト対策の展開に着目して上記課題へのアプローチを試みた。申請者が進めてきた都市環境史という領域に、疫病・感染症という要素を付け加えることで、新たな中・近世ヨーロッパの都市像を提示することを最終的な目標として研究を進めた。

３．研究の方法

本研究では、上記の目的を到達するため、帝国都市アウクスブルクにおけるペスト対策について、とくに（１）公衆衛生と（２）健康ポリツァイという二つに分けて具体的な考察を進めたが、途中で（３）ユダヤ共同体の動向とペスト被害の連関という新たな課題も追加した。

（１）公衆衛生については、とくに遺体の埋葬と上下水道の管理という要素に着目した。（２）健康ポリツァイについては、市当局による人口数把握、ペスト病院の設立、そして医療体制の確立のプロセスを分析し、都市の疫病・感染症対策の展開との関連性に着目した。（３）ユダヤ共同体の動向については、申請後に新たに浮上した課題となる。本研究計画の土台ともなった拙論「中世後期アウクスブルクにおける「大量死」―ペスト被害の通時的考察」（甚野尚志編『疫病・終末・再生―中近世キリスト教世界に学ぶ』知泉書館、2021 年所収）の合評会にて、中近世スペインにおけるユダヤ人をご専門とする評者の関哲行氏より、疫病対策とユダヤ教徒への対応の連関性について質問を受けたことをきっかけに、本研究の課題として、ユダヤ共同体への対応という論点も新たに追加することが必要だと判断したためである。そのため、当初の研究計画の進捗には遅れが発生したが、ユダヤ共同体という論点を追加したことで、疫病流行が社会に与えたインパクトをより立体的に検証することができる見通しを得ることができた。

４．研究成果

初年（2022 年）度は、本研究プロジェクトの意義と今後の展望について、成城大学経済研究所の第 92 回講演会にて「黒死病後の社会―繰り返すペスト被害と都市の疫病対策」と題して講

演を行った（2022 年 10 月 15 日）。また、中世後期に帝国都市アウクスブルクにて疫病対策と同時並行的に実施されたユダヤ共同体への施策について予備的考察を行い、早稲田大学プロジェクト研究所のヨーロッパ中世・ルネサンス研究所研究会にて「帝国都市アウクスブルクのユダヤ共同体に関する予備的考察」と題する口頭報告を行った（2023 年 1 月 21 日）。両報告では、疫病の流行期と流行期との狭間期に、都市がどのような疫病対策を実施しようとしたのか（あるいはしなかったのか）を考察する視点の重要性を指摘し、今後の具体的な検討課題を提示した。

2023 年度の成果としては、上述の成城大学経済研究所第 92 回講演会の講演録「黒死病後の世界―繰り返すペスト被害と都市の疫病対策」を成城大学経済研究所『年報』（36 号、2023 年 4 月刊行）で公表した。また、帝国都市アウクスブルクの疫病対策の展開をユダヤ共同体の動向との連関を踏まえて考察した報告「中世後期アウクスブルクにおけるユダヤ共同体と「包摂する暴力」」を、2023 年度九州西洋史学会秋季大会シンポジウム（於・福岡大学、2023 年 11 月 11 日）にて実施した。このシンポジウムは、科研費基盤研究(B)「中近世キリスト教世界における「包摂する暴力」」（研究代表：甚野尚志早稲田大学教授）との共催で実施され、本プロジェクトの内容が他の研究テーマと接続する可能性の手ごたえを得ることができたのは大きな成果であった。

2024 年度の成果としては、上記のシンポジウム報告を基にした論考「中世後期アウクスブルクにおけるユダヤ共同体と「包摂する暴力」（特集：中近世キリスト教世界における「包摂する暴力」―地中海とアルプス以北―）」（九州西洋史学会編『西洋史学論集』62 号、2025 年 3 月）の他、中世後期アウクスブルクにおけるユダヤ共同体の趨勢をまとめた「〔研究動向・展望〕帝国都市アウクスブルクのユダヤ共同体に関する予備的考察」（『九州歴史科学』52 号、2024 年 12 月）が挙げられる。上述した通り、ペスト対策とユダヤ共同体の動向との連関という、申請以降に新たな検討課題として浮上した課題に取り組んだため、当初の計画スケジュール通りに研究が進んだわけではないが、上記の二つの論考は、都市におけるユダヤ共同体とペスト対策の連関を考えるうえでの基礎となる重要な研究成果となった。

また、本研究プロジェクトと同様の問題意識をもった研究書の書評や新刊紹介の執筆等を通じて、本研究の成果をより広い問題領域のなかで考察するための示唆を得ることができたのも大きな成果であった。具体的には、佐藤猛・佐々木千佳編『ペストの古今東西―感染の恐怖、終息への祈り』（秋田文化出版、2022 年）の「新刊紹介」を『史学雑誌』（133(2)、2024 年 2 月）に、また都市の公衆衛生上の重要な課題となる水利技術の歴史について、近世オランダの治水史を分析した著作である中澤聡『近世オランダ治水史―「健全なる河川」と側方分水をめぐる知識と権力―』（東京大学出版会、2023 年）の「書評」を『西洋史学論集』（61 号、2024 年 3 月）に発表した。さらに、アンドリュー・ドイグ『死因の人類史』（草思社、2024 年）の書評を『図書新聞』（3645 号）に寄稿し、ペストを始めとする疫病に苦しみ続けてきた人類の歴史を包括的に捉える意義を改めて論じることができたのは大きな成果であった。また、疫病と同様に中世ヨーロッパの人々を襲った様々な自然災害については、『西洋中世文化事典』（丸善出版、2024 年）に項目「自然災害」を寄稿した。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計8件（うち査読付論文　0件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　4件）

１．著者名 渡邉裕一	４．巻 36号
２．論文標題 黒死病後の社会 ： 繰り返すペスト被害と都市の疫病対策	５．発行年 2023年
３．雑誌名 成城大学経済研究所『経済研究所 年報』	６．最初と最後の頁 57-82頁
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 渡邉裕一	４．巻 132（2）
２．論文標題 〔新刊紹介〕佐藤猛・佐々木千佳編『ペストの古今東西―感染の恐怖、終息への祈り』	５．発行年 2024年
３．雑誌名 『史学雑誌』	６．最初と最後の頁 88-89頁
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 渡邉裕一	４．巻 61号
２．論文標題 〔書評〕中澤聡『近世オランダ治水史―「健全なる河川」と側方分水をめぐる知識と権力―』	５．発行年 2024年
３．雑誌名 『西洋史学論集』	６．最初と最後の頁 73-77頁
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 渡邉 裕一	４．巻 41
２．論文標題 〔報告要旨〕中近世アウクスブルクにおけるペスト対策と健康ポリツァイ	５．発行年 2022年
３．雑誌名 比較都市史研究	６．最初と最後の頁 1～2
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.20720/cuhreview.41.0_1	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 渡邉 裕一	4．巻 13
2．論文標題 〔報告要旨〕帝国都市アウクスブルクのユダヤ共同体に関する予備的考察	5．発行年 2023年
3．雑誌名 エクフラシス	6．最初と最後の頁 152
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 渡邉 裕一	4．巻 52
2．論文標題 〔研究動向・展望〕帝国都市アウクスブルクのユダヤ共同体に関する予備的考察	5．発行年 2024年
3．雑誌名 九州歴史科学	6．最初と最後の頁 19～32
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 渡邉 裕一	4．巻 62
2．論文標題 中世後期アウクスブルクにおけるユダヤ共同体と「包摂する暴力」（特集：中近世キリスト教世界における「包摂する暴力」―地中海とアルプス以北―）	5．発行年 2025年
3．雑誌名 西洋史学論集	6．最初と最後の頁 50～53
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 渡邉 裕一	4．巻 3645号
2．論文標題 〔書評〕アンドリュー・ドイグ著『死因の人類史』（草思社）を読む	5．発行年 2024年
3．雑誌名 図書新聞	6．最初と最後の頁 1
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計3件（うち招待講演　1件／うち国際学会　0件）

１．発表者名 渡邉裕一
２．発表標題 中世後期アウクスブルクにおけるユダヤ共同体と「包摂する暴力」
３．学会等名 2023年度九州西洋史学会秋季大会シンポジウム「中近世キリスト教世界における「包摂する暴力」」（於・福岡大学）
４．発表年 2023年

１．発表者名 渡邉 裕一
２．発表標題 黒死病後の社会―繰り返すペスト被害と都市の疫病対策
３．学会等名 成城大学経済研究所第92回講演会（成城大学）（招待講演）
４．発表年 2022年

１．発表者名 渡邉 裕一
２．発表標題 帝国都市アウクスブルクのユダヤ共同体に関する予備的考察
３．学会等名 ヨーロッパ中世ルネサンス研究所研究会（オンライン）
４．発表年 2023年

〔図書〕　計1件

１．著者名 渡邉裕一（分担執筆「自然災害」）	４．発行年 2024年
２．出版社 丸善出版	５．総ページ数 2
３．書名 西洋中世学会編『西洋中世文化事典』	

〔産業財産権〕

〔その他〕

―

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関